
混ぜられたセカイ

だるま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

混ぜられたセカイ

【NZコード】

N5854Y

【作者名】

だるま

【あらすじ】

1600年。

今から400年前、世界中で多くの人間が突然行方不明となつた。原因も犯人も手段も全てが不明の怪奇現象。

人はこれを『神隠し』や『全世界民転生』や『地球外生命体による侵略』等と様々な説を打ち立てているが、決定的な学説は未だ一つもない。

その中で最も人気のある都市伝説的説が『異世界への転生』である。

護身術に長けた剣の達人が異世界を東奔西走する話です。

主人公は落ちこぼれでもチートでもありません。程々に強いです。

プロローグ

一人でいることには慣れていた。

物心ついた時に両親を事故で失い、その数ヶ月後にたつた一人の家族となつた妹も行方不明となつた。

不慮の事故と原因不明の事件により家族を無くした自分が、今となつてはその孤独さえ心地好い物となつてきている。

強がりと言わればそれまでだが、生憎一人でいる時間が長すぎたのだ。

友達もいることにはいたが、形だけの物である。

『あいつは友達がない』『家族もいなくて可哀相な奴だ』ただそう思われたくないが為に友達を作り、上辺だけ取り繕い、『自分は孤独だけれど可哀相な奴ではない』と世間に向かい声高に叫んでいたのだ。

既に中学に入る時にはそいつた周りとは違つ考えを持つていた事を覚えている。

周りにその事で優越感を得ていた事も覚えている。

そんな俺にも一つだけ打ち込む物があつた。青春と情熱を打ち込んだ物が。

それが刀だ。

我が一族は戦国時代から代々続く刀の名門だそうだ。初代様が生み出した流派が今でも受け継がれている。父も祖父も曾祖父もその流派を極めて来た。

父が死んだ後に自分の身を守る護身術として祖父に剣術を教わった。

そのせいか、中学で入った剣道部では多くの人にその才能を魅入られた。

中には羨望や嫉妬の感情もあつたが。

その剣道部で俺は一人の男に出会う。

後の親友となる男だ。

始まりは唐突だった。

「おいでめえ！」

中学三年間通いつめている武道館剣道場でいつもの練習メニューを終え、防具を片付けているといきなり背後から怒号が聞こえた。

訝しい顔で振り返ると学ラン姿の男が木刀を大上段へ振りかぶり今までに俺の脳天目掛けて振り下ろそうとしていた。

いかなる事態でも冷静かつ慎重に行動をする事を心掛けている俺だが流石に慌ててその場を飛びのいた。

「お前が柳刃やなぎばしん 仁にんだな？」

「確かにそうだが襲うなら本人かどうか確認してからじゃないのか

！？」

もしこいつが俺と間違えて誰かに襲い掛かつてたと考へると背筋が寒くなる。

「うつせ！死ね！」

内容によつては話を聞かないでもないが、如何せん、聞く耳を持つていらない。

しかも殺されなきやいけない様な事が身に覚えがない。

剣道部の備品である木刀を構え特攻してくる学ラン野郎を眺め嘆息し、手元の竹刀を構え迎え撃つ。

来る者は拒む。ひたすら拒む。それが俺だ。

後に聞いた話によるところが俺を襲つたのは完全な逆恨み、しかも恋愛事に關することだ。

動機から行動までたちの悪い奴である。

かみしま神島と名乗つたそいつは中学生にしては強いという程度だった。全中一位の俺には足元にも及ばない事は言つまでもないだろう。

そんな強烈な親友との出会いは俺の圧倒的勝利に終わった。

内容については割愛させて貰う。むさ苦しい男（神島）が爽やかな青年（俺）になぶられる光景は痛快極まりないが、流石に忍びない。何はともあれ、その男、神島 竜哉との出会いが俺の人生に大きな影響を与えたことは確かである。

それまで氷の様に冷たく、刀の様に鋭く尖っていた心は神島という灼熱の釜に放り込まれ瞬く間に溶けていった。

今となつては昔の自分はかなり恥ずかしい人間だったと思わざるを得ない。

両親の事故から神島との出会いまでの期間を反省と後悔の念を込めて俺は『暗黒時代』と呼んでいる。

神島は俺の暗黒時代にすかずかと土足で入つて来ては俺の生き方をことごとく否定し、捩れ曲がつていた俺の人格は元に戻つていった。友達というものに関する考え方も変わり、今まで無駄にした時間の分を取り戻す為にもよく笑う様になつた。

高校は神島と同じ高校へ通うことになり、今となつては神島は俺の親友となつてている。

そんな高校一年のある日、俺の人生の分岐点その二に差し掛かったのだ。

人生の分岐点その二

蠟燭から漏れる仄かな明かりがこの無駄に広い剣道場を照らしている。

築何年だかわからないような古さをもつこの剣道場だが、度重なる改修によりなんとかその姿を保っている。

歴史の教科書で見た大政奉還が行われた一條城を思い出させる様な造りの剣道場の真ん中で刀を握り素振りを繰り返す。

心を無にして、一連の動作を素早く滑らかに、そして美しく。

額を流れる汗も周りを飛ぶ煩わしい蚊も外の林が風に吹かれざわめく音も全く気にしない。

暗黒時代は幕を開けたが、より冷静にいる事が大事という俺の考え方には変わらない。

常に心に一枚の薄い膜を張り、そこから内側は何者にも侵されない不可侵の領域だ。

「なあどう思うよ？2組のあの子、あんなチャライ奴と付き合つてさあ。有り得なくね？あの清純さが良かつたのにあんなのと付き合つたらもう女の価値が大暴落だよな、ウォール街もビックリだよ」

剣道場の隅に携帯を弄りながらつるさに独り言を言つてる親友みたいな奴が居ても全く心を乱さない。

いくら俺が喧騒に満ちた中に居ようとも、俺の中にある心は穏やかで

ある。

波紋一つ広がらず水面に鮮やかな満月を映す池の様な心なのだ。

「よし、終わりだ」

日課の鍛練を終え刀を腰の鞘に戻し、つるさに蚊を片手で握り潰しながら親友の元へ歩く。

「やつてらんねーよなー、リア充死ねばいいのに」

先月新しくした畳に寝転がりぶつくさ言いつているのは知つての通り、神島だ。

「そんなこと言つたつて出来ないものは出来ないよ」

「これがモテる男の余裕つてやつか…」

神島は中学生の頃、好意を抱いていた女の子が俺の事を好きだったらしく、それが原因で俺を殺そうとして以来の付き合いだ。

こいつは外見自体は悪くないし性格だって何の問題もない。どこと無く日本人離れした顔立ちはハンサムの部類に掠るレベルだし、性格だってクラスの女子から『よくわからないけど優しそう』という評価を得ているのだ。

ただただ運が悪いのだ。

好きになつた子が彼氏持ちだつたり、転校してしまつたり。

「妹がいたら紹介してたんだけどなあ」

剣道場の入口の上に立て掛けたる家族写真を見上げながら俺は言

つた。

神島も事情を知っている為目を細め、そうだなあと言つている。

妹は俺が小学二年の時に行方不明になり今もそのままだ。警察の搜索の成果無く、犯人も原因も何もわかつていない。

妹が居たという形跡として残つてるのはこの家族全員が揃つている写真と俺の腰に差してある小太刀だけだ。

「もう日も落ちたし、ボチボチ俺は帰るわ」

「そりゃ、じゃあまた明日学校でな」

学校帰りに俺の家に寄り遊んで行くのは神島の日課となつていて。二人で剣術の練習をしたり、ゲームをしたり、くだらない話をしたりして盛り上がる。

昔の俺では考えられなかつた事だ。

今ではそれが普通になり当たり前になり日常と化している。人間変わらうと思えば変わるものといふことだ。

神島が入り口の扉に手をかけた瞬間。

フツ

部屋の中の蠅燭の火が消えた。

この広い部屋全体を照らすだけの数がある蠅燭の火が一瞬で消えた

のだ。

風が吹いた訳でもないのにだ。

「なんだ？」

神島も顔をしかめ周りを見回す。

その顔には不安とほんの少しの恐怖の色が混じっている。

日は完全に落ち、今日は朔月、月明かりもない。

辺りは完全に闇が支配している。

闇といつのは人間の根源的恐怖の対象でありこればかりはどう足搔いても無理だ。怖いものは怖い。

その恐怖といつ感情故か俺は自然と左腰の刀に手を伸ばす。

「早く出よつ、嫌な予感しかしない」

「だな。薄意味悪い」

俺の提案に神島も頷き、再び扉に手をかける。

「邪魔するぞい」

背後から何の前触れも無く声が聞こえてくる。

後ろを向くと一人の白髪男が立っていた。

白いローブに白いというよりは色が抜けた髪、顔には皺が目立つ。

どこからどう見てもただの老人だ。

「誰だ」

しかしただの老人とは思えない様な雰囲気を纏つていてる。

俺には相手を見ただけで戦闘力が数値化されて見えたりとか、相手の醸し出すオーラを見ることが出来るとか、そういう能力はない。だが、相手の目を見ればその人の強さというのが何となく分かるのだ。

そのおかげで今まで油断して負けるということはなかつた。

「わしはただのクリエイターじゃ」

予想通りだ。ただ者じゃない。

初対面で名前を聞きこんな突拍子もない事を言つてきた奴は俺の短い人生で未だ一人もいない。

初対面がかなりビックリランキング2位の座を授けるしかない様だ。1位はもちろん神島である。

「わかつた。んじゃクリエイターさん、色々聞きたい事があるんだけど」

「一つだけならいいぞ?」

ええ……。一つだけ……?

不法侵入してクリエイター名乗つて突っ込み所満載な外見して、もう言いたいことだらけなのに? 一つしか聞けないの?

「じゃあ聞くけど、何か用か？」

この爺さんが油断ならないことは分かりきつてこる。
だから俺は刀の柄から手を離さない。

爺さんを倒す為ではなく、俺の身を守る為にだ。

「ヤレヤレわしの弟子を連れ帰りに来たのと、君にもむづつと用
があつての」

「は？」

弟子？ 神島が？

セヒで俺はよつやく気付く。いつもあんなにひたすら神島がこんな
異常事態にしては静か過ぎる。

隣を見ると神島は頭を両手で抱え込みつづくまつていた。

「おー、神島…どうした？」「案ずるな、失った記憶が戻つて來た
んじやろ」

「失った記憶？」

爺さんは畳に擦れる程長いロープを引きする様にしながら歩いてく
る。

俺はいよいよヤバい気がしてきた。イレギュラーな事態が重なり過
ぎている。

この爺さんが何者かもわからないし、神島の失った記憶とやらもわ
からない。

情報を制するものは戦闘を制するが、今の俺には情報が全くないのだ。

「仁…逃げ…る…」

神島は必死に呟くが生憎親友をこんなヤバい状況で放置することは今俺には出来ない。

そう、今の俺には。

「お前は先に行ってなさい」

爺さんが神島へ指を差すと神島の体が光出した。

暗闇に慣れはじめた目には強烈過ぎる光が剣道場を照らす。

「ぐあっ…！」

神島は小さく呻くと光は更に輝き神島の体の中心へ収束する。そして、光が消えたと思つたら神島の体は既に跡形も無く消えていた。

「えつ…！？」

「さて、次は君だ。柳刃仁君」

呆然とする俺に向かい爺さんは指を差し出す。何で俺の名前を知っているのか気になつたが最早それどころではない。唯一無一の親友が目の前で姿を消したのだ。

両親、妹に続いて親友までも消えたのだ。

何の前触れも無く、いきなり現れたこの正体不明の自称クリエイターの爺のせいで、消えたのだ！！

「てめえ……神島をじりにやつた

「元居た場所に返したまでじやよ」

「……『柳葉無刃流壱ノ型』」

刀を握る右手に力を籠める。左足を引き腰を低くする。
一撃必殺の居合技、柳葉無刃流壱ノ型。

「柳葉無刃流は本来護身の為の流派じゃないのかね？」

「黙れ」

短く一言言い放ち刀を抜く。鞘に刀身を滑らせ加速させ、足の裏の皮が擦り切れる速さで爺との間合いを詰める。

横一文字。

確実に斬った感触はあったが、果たしてこの得体の知れない爺にどこまで効いたか？

振り向くと爺は田の前に立っていた。
右手をこじりに向けて。

「くそつ……」

吐き捨てる様に言つた言葉と同時に体が光出す。

「見事な剣技じや。それだけの腕前があるなら安心じやよ」

爺はホクホクと老人特有の穏やかな顔で頷く。状況が状況なだけに全く褒められた気がしない。むしろ、ムカつく。

「案ずるな、お主が行く所に龍哉もある」

一体どこに連れて行く気だこのへそ爺め。

「お主の妹もな

「なつ…！？」

行方不明の妹の所へ今から向かうってことか？
この爺に聞きたい事が山ほどあるが言葉が発せない。

「ふむ。わしの家もそろそろ畳にしようかの…」

俺が最後に見たのは、足を擦りながら新品の畳の感触を味わう爺だった。

人生の分岐点その一（後書き）

結構書いたらつて思つても案外書いてなかつたりするものですね…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5854y/>

混ぜられたセカイ

2011年11月20日13時57分発行